

KEIO SFC REVIEW

OKASHIRA登場	2
特集 1 デジタルアーカイブと知的財産権	4
When I was young	16
12 Co-net	18
特集 2 SFCは慶應か	20
小此木診療室	34
SFC蔵書	36
編集後記	38
付録 make your campus	39

OKASHIRAI登場

総合政策学部長
小島朋之



SFCの使命——状況適応でなく、状況創出へ

SFC（湘南藤沢キャンパス）も慶應義塾であり、なによりも忘れてはならないことは、1つに学生諸君のためのキャンパスであるということです。義塾の建学精神の1つは「独立自尊」です。一身の独立をはかる学生を育成することにあり、SFCの研究・教育もこの一点に収斂するはずです。私の恩師は常々「研究も学生のためだよ」と言われていましたが、いまになって実感するところしきりです。

忘れてならないことはいま1つに、SFCが全員参加のキャンパスであることです。SFCは創立から10年の若いキャンパスです。しかし、理念だけでなく、実績の面でも他の大学や社会から注目される成果をあげることができました。それは、なんといってもキャンパス一体となった協力が持続してきたからでしょう。「双子の学部」といわれる総合政策学部と環境情報学部、大学院（政策・メディア研究科）、SFC研究所。この4つがSFCという旗の下で一体となって活動し、学生、教員とスタッフが研究・教育そしてキャンパス運営、いずれについても全員参加で協力しながら進められてきました。今春からは新たに看護医学部が加わり、いずれ「三つ子の学部」といわれるようになるでしょう。

SFCは過去10年の「Version1.0」の成果と課題を踏まえて、次の10年に向けて「Version2.0」の段階に入りました。SFCの一員として、総合政策学部の学部長として、責任は重大です。考慮すべき点はさまざまですが、とくに以下の5点について強調しておきたいと思います。

継承と発展

わたしはこれまで、中国を中心とした東アジアの地域研究と国際関係に取り組んできました。中国では伝統を尊重しながら、同時に新たな方向を打ち出すとき、「継承と発展」という言い方をしてきました。伝統の精髓さえを継承すれば、伝統を乗り越えるような新たな方向を「発展」といって正当化します。いまでは「発展」だけでなく、「修正」さえも可能といいます。SFCも10年の成果の精髓を「継承」しさえすれば、「発展」そして大胆な「修正」があつてもよいのではないかと思っています。

SFCの創設理念は「問題発見」を重視した「知の再編」ですが、「Version2.0」のはじまりとともに、新しいカリキュラムが新しい時代の要請を見据えてすでにはじまっています。学部の「クラスター」、大学院の「プログラム」がそれです。SFC研究所の「ラボ」もまもなく発足の予定です。研究と教育いずれについても、取り組むべき当面の課題はSFC10年の理念を継承しながら、この「クラスター」、「プログラム」と「ラボ」を有機的に結合し、着実に「発展」あるいは「修正」していかなければならぬということです。

その重点は1つに、SFCとして看護医学部や藤沢の中高等部とのさらなる一体化です。いま1つに国際化です。すでにかなりの具体的な動きがあります。

「ネットワークガバナンス」は、アジア太平洋地域とのフィールドワークや遠隔授業によるネットワーク・キャンパス・イニシアチブを進めています。「環境デザイン」も欧米の大学との連携を進行中であり、「グローバルガバナンス」も遠隔授業の協力について韓国の延世大学、中国の交通大学と協力メモを調印しました。留学生の受け入れ、そのための施設の充実、学生の国際的なインターンシップによるフィールドワークの促進なども進められていくべきでしょう。国際化はアジアとの連携だけではありません。ヨーロッパ、中東、アメリカなどの研究・教育の両面での交流がさらに活発化されるべきでしょう。

先進的実学の拠点としてのSFCのさらなる充実

慶應義塾全体も安西塾長の下に新体制が発足し、「義塾21世紀グランドデザインの基本方針」として「6つの先導」が打ち出されています。「教育」、「学術」、「新実業」、「知識・スキル」、「知的社会基盤」、「キャンパス環境」のどれをとっても、SFCがこれまで進めてきた実績をモデルにしたもので、SFCはなにも新しいことをしなくてよいようにさえ見受けます。しかし、塾の「先導」方針を錦の御旗にし、あるいは「先導」方針を逆手にとつて、SFCがやりたいこと、やるべきことを大胆に提案していくべきでしょう。

提案の重点になるのは、「知的社会基盤」の「先導」でしょう。イシューとしての環境、健康、行政、治療は新たにSFCに加わった看護医学部も含めてSFCがすでに取り組んでいます。それらのイシューの解決をサポートする最新の技術とネットワークもSFCにはすでにあります。そして解決の処方箋としての政策作りも、SFCの総合政策学部と大学院のメディア・ガバナンスが取り組んできました。こうしたインフラを力に、SFCの「フラッグシップ」として目に見えるように、新たな先端研究の実験とその実践まで含めた「研究院」を提案してよいのではないでしょうか。「Version2.0」ではプロジェクト中心の研究・教育がめざされていますが、こうした「研究院」のなかで進められるプロジェクトに学生、大学院生も積極的に参加して、教員とともに「学びながら、教えあう」義塾の伝統をさらに活性化していくことができるでしょう。

融合と主体性

SFCがこの10年間にあげた様々な成果は、キャンパスの融合的な活動の所産です。学生、職員と教員がSFCスタッフとして一丸となって活動してきたこと、総合政策学部、環境情報学部、大学院そしてSFC研究所が組織の垣根を越えて研究と教育に一体となって邁進してきたことがそれです。こうした融合はSFC卒業生も含めて、これからもますます必要です。しかし同時に、総合政策学部は学部としての主体性を意識して、SFCの融合をさらに高い次元に引き上げる努力をしなければならないでしょう。

主体性を意識するということは、SFCの「理念と構想」を共有しながら、総合政策学部が「policy management」から「governance」に力点を移した研究と教育を推進するということでしょう。「policy management」が「政策運営」の技術であるとすれば、「governance」は問題の発見、発見された問題の処方箋となる政策選択肢の作成、そして選択への合意形成から政策実施、そして結果の評価までの循環過程への主体的で効率的な関与の研究と実践のあり方ということです。環境情報学部、看護医学部、大学院とSFC研究所との融合の中でそれらが提供する最新のイシュー、ツール、ネットワークとコンテンツを活用しつつ、総合政策学部は政策の形成と実施の両面にわたって独自の研究と教育を模索しなければならないでしょう。その方向の一つは、政府の枠を超えた新しい「協治」としての政策の研究・提言と教育の拠点としての社会的貢献でしょう。こうした観点から、SFCの「フラッグシップ」プロジェクトに関わっていくべきでしょう。

全員参加と少数精鋭

SFCの研究と教育を支えるために、構想作りから施設の整備と維持にいたるまで、さまざまな運営業務がこなされなければなりません。しかし創設から10年を経て疲れ果て、「SFC功なって万骨枯る」状態が出現していないとはいえません。SFCの研究・教育とキャンパス運営は、やはり創設時のように全員参加が必要です。全員参加が結果として認識の共有と負担の軽減につながり、研究・教育の両面で大きな成果も期待できるはずです。7月の七夕祭、11月の秋祭、SFCコンソーシアムなど既存の行事への積極的な参加はもちろんですが、「Version2.0」の新たな伝統を創出するような新たな試みの積極的な提案も期待しています。

研究・教育いずれの面でも先端キャンパスであるということ

SFCは、時代の要請を先取りして創設されました。今後もこの姿勢は堅持されるべきでしょう。もちろん、状況を正確に受けとめ、状況を考慮すべきでしょう。しかしSFCの真骨頂は状況を踏まえながらも、新たな状況を創出するところにあります。そうした姿勢で、皆さんも自らの営為を通じて新たな伝統を創造する、「自我作古」の作業に取り組んでいかれることを希望しています。

デジタルアーカイブと 知的財産権

資料の保存と利用を両立することは昔から図書館や美術館が抱える課題であった。歴史的に、また文化的に価値のある資料を保護して次の世代へ引き継ぐことと、人々に情報を公開し文化活動を推進することは時に矛盾する。特に稀観書、希少資料と呼ばれる資料に関する問題は深刻である。これらの資料は数が少ない、損傷している、痛みやすい、そして第一に失われてはならないといった理由で取り扱いが難しいことが多く、大抵公開に強い制限がかけられている。

しかしデジタル技術の出現によってこの問題に一つの解決方法が与えられようとしている。それが今回取り上げるデジタルアーカイブである。デジタルアーカイブは対象をデジタル画像化し、それをもとにデータベースを構築してインターネットによる一般公開を目指す、というものが基本的な流れである。このようにデジタル化することの強みは、当然ながら劣化しないこと、何度も複製が可能であること。なかなか公開できなかつた稀観書であっても、一度デジタル化してしまえば多くの人が利用できるようになる。そして願わくはできるだけ多くの資料をデジタル化して人々の情報基盤を作り上げること—それがデジタルアーカイブに関わる人々の夢かもしれない。

それでは、デジタルアーカイブとは、どこで誰が、どんな作業をしているのだろうか。一口にデジタルアーカイブと言つてもその対象も主体もさまざままで、一定のイメージでは捉えがたい。基本的な作業の流れにしても、実際は対象や主体の性格によって大きく変わる。

慶應義塾所蔵グーテンベルク聖書の一部分



にする）を対象にしたものもある。つまり、テキスト、画像、立体物に加えて動きや音声もその対象となるということである。作業を進める主体は大学や図書館、美術館、博物館、地方団体、政府省庁などである。最近ではさらに情報産業界の企業も加わって研究が進められている。

実際の作業としては、最も一般的な絵画のデジタルアーカイブ化の場合、まず対象の撮影を行ってデジタル画像を取得する。デジタルカメラで撮る場合もあれば、アナログのフィルムで撮る場合もある。アナログの場合はフィルムを現像してからスキャナーで画像を取り込み、デジタル化する。このようにしてデジタル画像を取得したら、次にそれを整形する。角度の微調整や色調補正など、神経を使う細かい作業である。使える画像が出揃ったら、データベースを構築する。ここでユーザーの使いやすさや、画像検索の適切な方法などを探っていくなければならない。そして最後に画像の所有や流通の条件を整備して、インターネット上で公開となる。

しかし実際は最後の段階までたどり着いたプロジェクトはほとんどない。デジタルアーカイブはまだ着手されてから十年も経つておらず、まだまだ実験的な色合いの強い分野である。基礎的なデジタル化技術でさえ未確立な状況であり、それが技術を試行錯誤で身につけながら作業を地道に進めているというのが現状である。デジタル画像の質に関しては特に決まつた基準がないので閲覧用の簡単なものから研究用の高度なものまで様々である。今現場の人たちの間で一番求められているのは、デジタル化実施のためのガイドライン設定やモデルケース作りである。

そんな中で一九九六年から慶應義塾大学で行われているHUMIプロジェクトによるデジタルアーカイブ化は、教育研究の用途としてはもとより、一般的な閲覧によるデジタルアーカイブ化は、教育研究の用途としてはもとより、一般的な閲覧にも耐えうる質の高いものとなつており、その実践を通してモデルケース作りを進めている最中である。HUMIプロジェクト後に発足したDRMプロジェクトでは、デジタルアーカイビングに関わる人員の育成から財源確保、推進政策の樹立、コンテンツ産業のビジネスモデル作りまでさらに大きな視野で体制作りに取り組んでいる。

今回の特集ではデジタルアーカイブ化の慶應義塾における取り組みを紹介する。また後半では、デジタルアーカイブがこれからさらに発展していく過程で重要な著作権・所有権との関係を見る。（刀田）

view 01 what's デジタルアーカイブ?

慶應義塾大学HUMIプロジェクトによるデジタルアーカイブ例



HUMIプロジェクトホームページ
「Treasures of Keio University」
(<http://www.humi.keio.ac.jp/treasures/index.html>)より。写真左上=慶應義塾大学図書館所蔵/レッソン「フウチョウの自然誌」より"Le Tiflet, Mâle adulte ou par devant"、写真左下=同誌より"Le Paradisier petit-émeraude, Mâle adulte"、写真下段中央=慶應義塾所蔵/グーテンベルク聖書冒頭ページの一部、写真右上=慶應義塾図書館所蔵/明治錦絵(George S. Bonnコレクション)落合芳幾「横浜英吉利西商館繁栄図」、写真右下=慶應義塾図書館所蔵/明治錦絵(George S. Bonnコレクション)昇齋一景 東京名所四十八景「日本橋夕景」



写真上=『弥兵衛鼠』の冒頭の挿絵

写真下=研究の用途にも使える高精細画像であるため、これだけ拡大しても画質を保っている



その共同研究当初の役割分担は、瀧川

研究室がHUMIープロジェクトの技術を開発しながら画像データとテキストデータを制作し、日立製作所がそれらのデータをバイオット電子図書館実証実験システムに統合入力するというものであった。

その成果が上記のサイトから公開されている一部である。なおそれらの公開されているデジタルデータは慶應義塾とIPAの共同所有にするという合意がなされている。

瀧川研究室は、一九九七年以来年にわたる共同研究成果の検討の結果、実証実験システムの検索性能の問題点を指摘し、その点での改良を目指してIPAの提案が受け入れられ、日立製作所との新たな共同研究契約に基づいて瀧川研究所図会データベースの提案をおこなった。その対し、『広重東海道五十三次画像データベース』、『中世西欧写本における書体の変遷』、『江戸・京都・大和奈良・古地図と名所図会データベース』の提案をおこなった。それらも現在上述のサイトから公開されている。

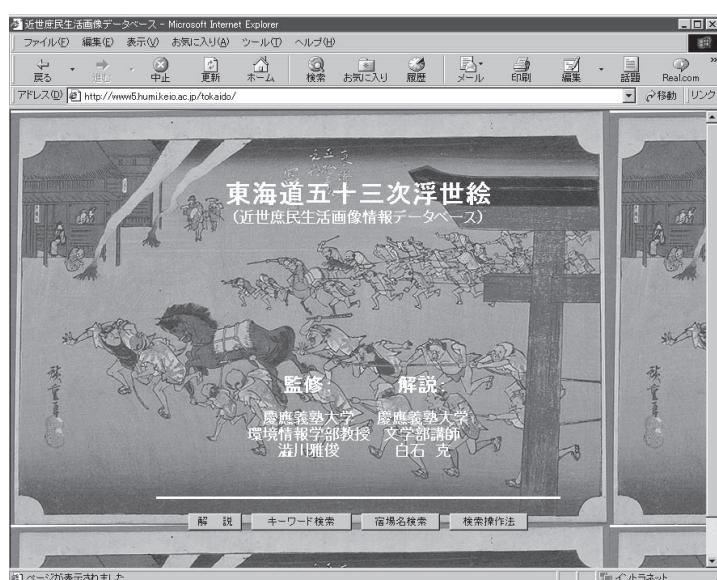
浮世絵はグラフィティ

『広重東海道五十三次画像データベース』構築と開示の提案に際して瀧川研究室は、次の趣意を掲げた。浮世絵はいまでは芸術的創作と評価されているが、同時代的には世俗のグラフィティであり、それは文字言語テキストで継承されている往時の文化を具象化する情報メディアである。その一葉一葉には当時の世相や世情を伝える事物事象の図像がデフォルマされて描かれており、いまでは消え去ってしまった人びとの生活と経験を視覚的に再現するためには、あたかも言語文字テキス

トの目次や索引のような検索装置を備えたデジタルテキストが必要である。

この東海道五十三次データベースを二木麻里は『オンライン読書』の挑戦』でデジタルアーカイブが「小宇宙を実現したと表した」と評価したが、それを可能にしたのは、このデータベース構築に当たって編纂した『近世旅シソーラス』である。このシソーラスはデータベ

ースに収録された三八〇道中画（広重はシリーズの東海道五十三次道中画を書いて出版している）の一画一画に描かれている旅人、風景、風俗などの図像のすべてを抽出し、それらのすべてで画像を表示用語を調べ、いわば江戸時代の道中用語集を編集し、事物事象とその語彙を分類すると同時に同義語・類語を整理しディ



『東海道五十三次画像データベース』のトップページ
http://www5.humikeio.ac.jp/tokaido/ (編集部注: 現在、塾内からのみ利用可能)

スクリプター（索引語）を決定し、リストしたものである。検索性を高めるデータベース構築は、各道中画を構成する図像にディスクリプターを的確に付与して検索キーとして入力する作業が文字通り鍵となるが、この作業は二人の学生（現大日本印刷勤務北野貴之と現看護医療学部一年佐藤みほ）の卒業制作として完遂された。

愛しの奈良絵本

デジタルアーカイブとはいま、文化遺産のデジタル画像による二次的記録として理解されている。そしてその作業は、シソーラスの編纂など重要な工程もあるが、幾つかの作業工程（①画像データ

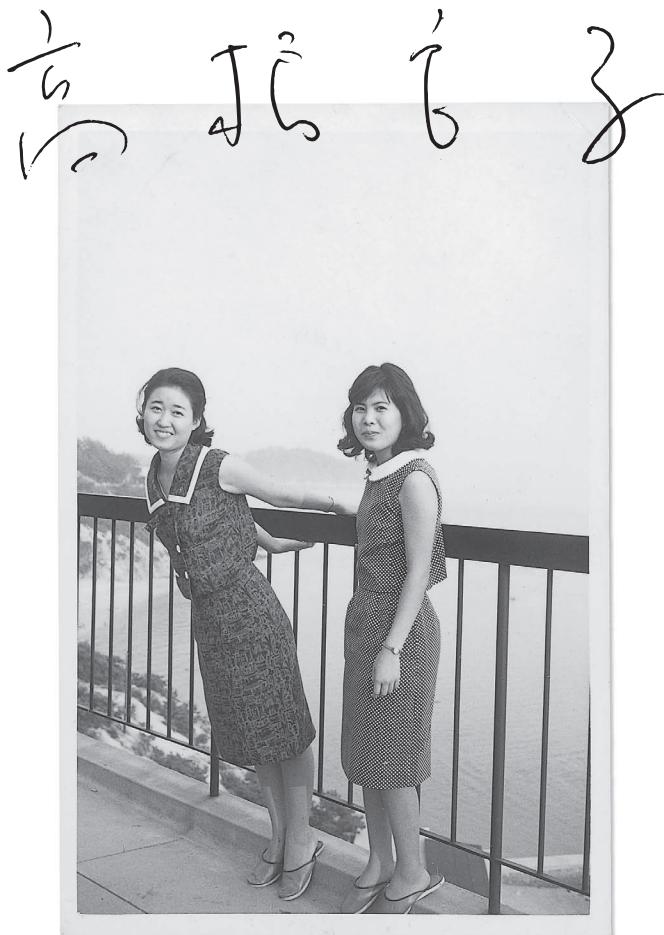
キャプチャーリング、②画像処理、③テキストデータの制作・入力、④データベース設計、⑤データベース処理、⑥データベース公開・運用など）が適正に、有機的に連結されて完成に至る。昨年十一月瀧川研究室はわが国

の成果を期待し、それを自館の利用者のために活用する方法を探りたい」として、極めて関心が高いことがわかった。

瀧川研究室では一九九七年からそれを行ってきているが、二〇〇一年春学期から奈良絵本のデジタルアーカイブに着手した。奈良絵本は、室町末期から江戸時代前期にかけて、神話・伝説などに基づいて創作された物語文学である御伽草子の挿絵入り写本・絵巻に付けられた類名である。それはいま、わが国はもとより世界中の有力な図書館・美術館に四〇〇〇点ほど遺されていると推定されているが、慶應義塾図書館にも五〇点ほどが架蔵されている。日本文学史上のその意義を把握する識見を持つていながら、そのいとしさをもつと多くの人たちと共有できるのではないかと思っている。

私たちとは、総合政策学部藁谷郁美助教授の参加を得て、先に慶應義塾図書館所蔵御伽草子展覧会を監修した文学部石川透助教授との共同研究で、そのデジタルアーカイブをいま進めている。石川助教授はいま四半世紀前に開催された国際奈良絵本会議の再興を目指んでいるが、この奈良絵本データベースがその会議をフイーチャーするものの一つとなれば幸甚である。ところでいま私は石川助教授と共に、かつてその会議に所蔵奈良絵本を出展し、おそらくは二度目の会議にも重要な参加者である大英図書館（ロンドン）に来てそれらの絵本・絵巻を調査中の一時を利用して、この一文を書いている。

When I was young



大学4年時友人と小豆島で（高橋教授は右）

高橋 良子（たかはし よしこ）

学生にとって教員は遠い存在である。だがそんな教員にも若かりし頃、学生時代があった。教員たちはどのような学生時代を過ごしたのだろう。そしてそれはその後の人生にどう影響を与えたのだろう。このシリーズでは、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。

連載第二回目である今回は、高橋良子環境情報学部教授に話を聞いた。同志社女子大学卒業後、日本で女性初のJALフライティスピッチャーの職に就いた高橋教授は、結婚と同時に渡米。米国に滞在中、恩師の紹介でスタンフォード大学大学院に入学し、博士課程まで進んだ。

夏休みも後半にさしかかった暑い日の昼下がり、高橋教授は美味しい紅茶とケーキ、そして楽しいお話を我々を気さくに迎えて下さった。

**教師なんかにはなるまい、
と誓った学生時代**

私は高校生の時、大学に行くつもりはなかったんです。とにかく早く親の家を出て、独立したかった。でも高校を卒業したら就職すると言うと、担任の先生に「大学に行つて四年間我慢すれば、将来のオプションが考えられないくらい広がるから」と大学進学を勧められました。その時、高校三年生だったんですが、慌てて受験勉強を始めた。そうして大学に入学したもの、まったく勉強せず、とにかく卒業さえすればいいと思っているような学生でしたね。その頃の私のしていたことといえば、「大学に行つてきます」と言って家を出るんだけど、大学には向かわずに、そのまま金閣寺や銀閣寺に行く。そうやって京都のお寺を

がそんな教員にも若かりし頃、学生時代があつた。教員たちはどのような学生時代を過ごしたのだろう。そしてそれはその後の人生にどう影響を与えたのだろう。このシリーズでは、学生時代の体験を中心に、教員たちの人生のターニングポイントを探る。

連載第二回目である今回は、高橋良子環境情報学部教授に話を聞いた。同志社女子大学卒業後、日本で女性初のJALフライティスピッチャーの職に就いた高橋教授は、結婚と同時に渡米。米国に滞在中、恩師の紹介でスタンフォード大学大学院に入学し、博士課程まで進んだ。

夏休みも後半にさしかかった暑い日の昼下がり、高橋教授は美味しい紅茶とケーキ、そして楽しいお話を我々を気さくに迎えて下さった。

巡ったあとは、三条の駅から鴨川沿いの河原を歩いて、家に帰るのが日課でした。今でもそうなんですか、一人でいるのがわりと好きなの。難しい哲学の本をウンウン唸って読んだりしながらね。本を読みながら頭の中で旅をする、まさにアームチエア・トラベラーというのでしょうか。要するに、一人で夢想しているのが好きだったのね。とにかく大学生の頃は、そんな風に毎日を過ごしていました。大学に尊敬できる先生なんて殆どいなかつたし、教師には絶対なるまい、そう思っていました。

日本女性初、JAL

フライトディスパッチャーヘ?

私が就職活動を始めたのは一九六八年ですが、当時は女性が働ける職場は、とても限られていたんです。女性が一生仕事を続けるなんてなかつた。男女雇用機会均等法なんてどんでもないっていう時代だったから。その中には、半官半民の会社だったJALは、労働条件も最高で、女性のお給料も比較的高かつた。JALなら食いつばぐれることはないと想い、JALを受けようとしたんです。またJALの仕事は、デスクワークではないところが魅力だった。あと英語が使えるのがよかつたですね。なぜかというと、英語ができたら、独立歩で食べていけると思ったからなんです。その頃の私は、一生結婚しない気でいましたからね。

そういう考え方もあるって、JALを受けたJALは五十何倍という物凄い倍率でした。何しろJALは女性の憧れの職場だったから。就職試験の日は雨が降っていて、試験会場の駅で電車を降りたら、女の子の赤い傘がずらーっと並んでいたのを見て、驚きました。だから、最終合格を知らせる電話

が来た時は、もう有頂天になって飛び上りましたよ。

JALに入つてからは、フライトディスパッチャーという職についたの。フライトディスパッチャーというのは、いわゆる管制官ですが、私が国内で初の女性フライトディスパッチャーになるはすでした。約半年間のトレーニングを終え取得した航空無線通信士の国家資格は、終生免許だから、今でも有効なんです。けれど、就職して一年目に今の主人と出会い、仕事を辞めたの。仕事 자체はすぐエキサイティングで、面白い時期にさしかかっていたんですね。結婚相手が同じ職場の同僚だと、世界が狭くなると思って、きっぱり辞めようと決意したんです。

いつでもやりたいことに全力投球

その主人があるときサンフランシスコに転勤を命じられ、主人について米国に渡つたものの、向こうではすることがなくて、暇だつたんです。そこで英会話の勉強をしようと近所の英会話学校に通い始めたんですが、その先生よりも私のほうが文法の知識がずっとあつたの。当時の日本の英語教育は、話すことよりも文法を重視していましたからね。先生に向かつて、動詞がこれこれこうなつていて、そう話すけれどもそれは文法的に違つ、なぜそこに不定詞が来るのかなどと指摘していると、ある日の先生に「サンフランシスコ州立大学の修士課程に来ませんか」と誘われ、もう一度学生をすることになつたんです。州立大学業間近の修士課程二年の時、言語心理学の研究室でプロジェクトに参加しました。その研究室の先生の自身が、当時スタンフォード大学の博士課程へ通つておられたのがきっかけで、私はスタンフォード大学の博士課程進学を薦められたのです。その時の

応募論文は非常に拙い英文で、無謀にもネイティブチェックさえかけなかつたのに、なんと合格。その後結局同大学で博士号取得まで進みました。スタンフォード入学時の研究テーマは第二言語習得でしたが、卒業する時には、音声をコンピュータで分析するという研究をやついて…。だから私が来た時は、もう有頂天になって飛び上がりましたよ。

JALに入つてからは、フライトディスパッチャーという職についたの。フライトディスパッチャーのことは、いわゆる管制官ですが、私が国内で初の女性フライトディスパッチャーになるはすでした。約半年間のトレーニングを終え取得した航空無線通信士の国家資格は、終生免許だから、今でも有効なんです。けれど、就職して一年目に今の主人と出会い、仕事を辞めたの。仕事 자체はすぐエキサイティングで、面白い時期にさしかかっていたんですね。結婚相手が同じ職場の同僚だと、世界が狭くなると思って、きっぱり辞めようと決意したんです。

「運命の神様が来たら前からつかまえる」というものがあります。この「運命の神様」というのは、ローマ神話に出てくる頭の前部にしか髪の毛が生えていない女神のことです。このことわざは、彼女が気まぐれに突然やって来ても逃がさないようにしないといふ意味を持っている。つまり「好きだと思えることを精一杯やりなさい」ということです。英語のことわざでいえば、世界は随分広くなりますよ。

一つ学生に言えることがあるとすれば、「好きだと思えることを精一杯やりなさい」ところころ変わって、その度に仕事や研究テーマも変えたけれど、その瞬間はそのことにぐんとのめり込むんです。何かをやりたいと思いつたら、まずやってみたり持つて、おもしろいと感じることをただひたむきにやつていれば、向こうから自然と運が訪ねてくるものなんだ、ということ。但しそういう場合でも、コミュニケーションスキルは非常に大切。おもしろいアイディアを持つて、上手に「コミュニケーション」すれば、相手が自然と乗つてくる。自分のアイディアを持ち、さらにそれを相手に上手く伝える能力が必要なんです。

『幸運の女神の前髪をつかめ!』

普段、学生を見ていると、「ああ、もつたない人生の過ごし方をしているな」と思つたことがあります。具体的に言うと、勉強していない。私の授業がつまらないのかもしれないめりこめる自分だけの何かを、皆さんもぜひ見つけてください。

そして最終的に、人間としてチャーミングであつてほしい。チャーミングというのはもちろん、「きれい」や「かわいい」などという単純な意味を指すのではなく、心にいろんな小箱を持つということです。今日はこの話を、明日はあの話を、というように、人をひきつける魅力を持つてほしい。要するにエンターテイナーであるということですね。たとえば家に親しい人を招いたら、おもしろい話と美味しい食べ物、そして美味しいワインで心からもてなす。そしてまた来たいなと思わせるような場所をつくるのが、今の私の理想なのです。

SFCは 慶應か

「SFCは慶應らしくない」…SFCを訪れる人の多くがそう感じるようだ。それはSFCが、いわゆる“慶應らしい”三田などの他キャンパスと、多くの点で異なっているからであろう。

SFCと他キャンパスの違いは、キャンパス内の建築物、カリキュラム、授業、入試制度など、随所に見受けられる。

SFCが設立されて12年経つ。SFCは未だに、「慶應らしくない」のだろうか。だが、そもそも「慶應らしさ」とは何なのであろうか。今回の特集では、「慶應らしさ」とは何かを問うとともに、SFCと慶應義塾との関係について考えてみたい。

(編集部 注: 慶應義塾では福澤先生と敬称をつけるのが慣例であるが、本特集では略す)

初期の塾の様子

慶應義塾は一八五八年江戸中津藩邸内の学習塾で、福澤諭吉が蘭学を教えたことに始まる。それまで福澤は大阪にある緒方洪庵の適塾で、蘭学（オランダ語を基礎とする西洋の学問）の学習にはげみ、塾頭を務めていた。福澤は、藩の命令で江戸に出て、はじめは藩の子弟に蘭学を教えていたが、間もなく、これからは英語が国際語になることを見抜き、福澤の塾を英語を基礎とする洋学塾に切り替えた。

福澤は江戸へ出てから十年の間に、三回海外視察を行っている。海外で学んできたことをもとに教育カリキュラムを作り、洋学を教えた。特に海外に留学しただけでなく、幕臣として外国に出る機会があつただけだが、彼は持ち前の観察力によって多くのことを学び取つて帰ってきた。鉄道に乗れば、他の日本人が鉄道の速さや景色の美しさに見とれている間に、線路の長さ、資金の流れ、動力のメカニズム等を考え、調べた。物事をシステムティックに捉えることが福澤にはできたのである。そして、それは当時の日本人の多くに決定的に欠けていた能力であった。

三度目の海外視察を終えた翌年の一八六八年、福澤は塾を築地鉄砲洲の藩邸内から新錢座（現在の浜松町）に移し、塾の名を当時の年号をとつて慶應義塾と命名された。“義塾”と名乗つたのは、閉鎖的な私塾でなく、開かれたパブリックなスクールであるという宣言である。福澤は、自分は単なる学校の先生ではないし、塾生も単なる生徒ではないと言つた。そして先に学んだ人が後の人を教え、一緒に学んでいくことを理想とした。いわゆる半学半教である。一人の教師が生徒を教えるという今までの私塾の体制を脱して、新たな形の学校を作ったのだ。

福澤はまた、学生とのパーソナルな触れ合いを大切にした。学生の名前はもちろん、出身や家族のことも覚えており、学生を驚かせた。就職の世話もよくした。塾生の就職先は専ら民間企業であり、新聞社、鉄道会社、保険会社、電気会社など当時のニュービジネスが多かつた。こうして慶應義塾の人脈は多方面へ広がり、義塾が多数の企業に認知されるにいたつた。

慶應義塾創設時を振り返る

view 01

慶應義塾は、どのような人間を育てるために作られた学校なのか。学生に何を求め、何を教えようとしているのか。その答えを知るために、編集部はセイコー株式会社名誉会長で慶應連合三田会の会長でもある服部禮次郎氏に取材した。氏は、社団法人福澤諭吉協会理事長もつとめ、2001年には慶應義塾の歴史をまとめた『慶應ものがたり—福澤諭吉をめぐって』（慶應義塾大学出版会）を上梓された。以下は、服部氏の語る慶應義塾のルーツである。

小此木診療室

フロンティアに挑むSFCは、現代社会が抱える様々な問題に直面する。そうした問題は、政治や経済など社会構造に関するものだけではない。個人の価値観や家族形態の変化に伴って生じる人間の心の問題も含まれる。たとえば現代の日本社会では少子化や共働き、シングルマザーの増加、パラサイトシングルの登場に伴う問題が発生している。これらは新しい価値観と、それまでの伝統的価値観のズレから生じている。人々はこのズレをどう処理すればよいかわからず心に葛藤を抱える。この人々の心の問題、葛藤に洞察を加えるのが精神分析学である。一九九六年まで環境情報学部教授を務め、現在は同学部客員教授として教壇に立つ小此木啓吾氏は、日本における精神分析学の第一人者である。そこで、この連載企画では、小此木氏に現代社会に生きる人々が抱える心の問題と、その対処法について紹介してもらう。

ニューヨーク・テロと喪の心理 (MOURNING)

環境情報学部客員教授 小此木 啓吾

私のライフワークの一つに、「対象喪失とmourning（喪の心理）」の研究がある。

二〇〇一年九月十一日のニューヨークのテロ事件で、この私の研究にとても切実な新たな体験が起つていて。実は私は、

あのワールド・トレード・センターに支店を置いていたF銀行のメンタルヘルスに三十年余かかわっている。不幸にも、F銀のニューヨーク支店は七十九階から八四階まで、一七〇〇人の職員（日本からの駐在員は一二〇人）がいたが、支店長をはじめ一八名が行方不明になつた。

行方不明になられた方々のご家族、そして、サバイバーたちの現在及び今後

のメンタルケアについて、現地に仕組みをつくる依頼を受け、東京にいながら種々の助言・指導を行つた。幸いにも、実働できる日本人の精神科医が三名ほど、また、一名の臨床心理士と人事部厚生課の人々との間で話がまとまり、メンタルケアの仕事が昨年十月に入つてようやく軌道に乗つた。

精神医学的には、災害を体験した人々はその後四週間くらいの間、急性ストレス障害に陥る可能性が高い。その体験にだけ注意が集中し、主観的な感覚が麻痺したり、情緒不安定になつたり、睡眠障害が起つたりする。いま、この状態から次のPTSD、つまり外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder) に移行して慢性化する時期になつた。一般的にはPTSDに陥る人々は5%から

十%くらいかと言われているが、その後の政治・社会状況やケアの受け方などによつて左右されるのはもちろんだ。したがつて現在のニューヨークのメンタルケアは、PTSDへの移行や慢性化を予防することに力点が置かれる。お互にグループになつて体験を語り合つたり、そのときの衝撃や現在の心境、種々の思いを語り合うコミュニケーションはとても有意義だ。また、そのグループ・メンバー同士での心の支え合いも大切だ。

現地の状況の報告を受ける過程で改めて実感したことがある。「行方不明になられた方々のご家族の気持ちは、本当に複雑なのです」という。災害の現場に近づいて一番衝撃を受けるのは、ビルの壁などに、行方不明になつた人々の写真、名前、連絡先などが一面に張られている

ことだという。その中に、ときどき日本語のものが見受けられるときはとりわけ胸が痛んだと、帰国したスタッフは報告している。

そして、この報告によると、行方不明になられた方々のご家族に共通の気持ちには、まだどこかで存命しているのではないか、また戻ってくるかもしれないとう思いである。そう思うと、愛する人を捨てて日本には戻れないという。そして夜になると、無事に元気な姿で戻った再会の夢を見る。

愛情・依存の対象を失った対象喪失に引き続く喪の心理の研究では、まず最初に、愛する対象を失ったことを否認する段階がある。またそれは、「いまは一時的にいなくなっているけれども、きっと戻ってくる」という再会の願望を生む。

行方不明の方々の家族は、今はまだこの段階におられるようだ。どんな場合でも、喪が明けるには少なくとも一周忌、つまり、一年はかかるのだから、当然といえど、自然なのが、今回の場合と普通の近親者の死に出会う場合とで一つ大きな違いがある。

つくづくそう実感したのは、たまたま、この仕事をしている途中で私の親友の精神科医の奥様がガンで亡くなられた。そのご葬儀のときである。ご出棺に先立つて、夫はもちろん身近な人々が遺体に最後のお別れをした。これは人生で最もつらい体験である。ところが、私の親友は、二、三日後に会ったときに、「あの体験

はとても貴重でした。あそこで自分自身もはつきりと妻の死を改めて確認した気持ちになれた。みんなが一緒に泣いてくれたことで心を支えられたような気がします」という。遺体と直接対面しない気持ちには、まだどこかで存命しているのではないか、また戻ってくるかもしれないとう思いである。そう思うと、愛する人を捨てて日本には戻れないという。そして夜になると、無事に元気な姿で戻った再会の夢を見る。

愛情・依存の対象を失った対象喪失に引き続く喪の心理の研究では、まず最初に、愛する対象を失ったことを否認する段階がある。またそれは、「いまは一時的にいなくなっているけれども、きっと戻ってくる」という再会の願望を生む。

行方不明の方々の家族は、今はまだこの段階におられるようだ。どんな場合でも、喪が明けるには少なくとも一周忌、つまり、一年はかかるのだから、当然といえど、自然なのが、今回の場合と普通の近親者の死に出会う場合とで一つ大きな違いがある。

つくづくそう実感したのは、たまたま、この仕事をしている途中で私の親友の精神科医の奥様がガンで亡くなられた。そのご葬儀のときである。ご出棺に先立つて、夫はもちろん身近な人々が遺体に最後のお別れをした。これは人生で最もつらい体験である。ところが、私の親友は、二、三日後に会ったときに、「あの体験

ロリストに攻撃されるかわからない不安に一派相通ずる心理がある。いつ、どこで襲われるのかわからない。わからない疑惑暗鬼にみんなが取りつかれる。そこにも不確かさがある。この種の心理状態に陥った集団を「アザンブション・グループ(憶測集団)」と呼ぶ。人間の集団が健康に機能するときは、特定の目的、対象があつて、それにどうかかわったらよいかが明確な「ワーク・グループ」なのだが、いまや米国、いや自由社会全体がこの憶測集団心理に動かされている。そうなると、いつになつてもその不安から離ることはできないし、かといって解決もできない。いつも心がそこに奪われているという困った精神状態に陥りかねない。

さらに、その時もつと気をつけなければいけないのは、報復心理とも結びついで、はじめて人間は現実に向かう心を取り戻すことができる。そのような別れの作業が必要である。この心の営みが達成されるまではいつまでも死の世界に心を奪われたままでいなければならない。

いまニューヨークには、五千人のこの種の精神状態のままいる人々がいる。

どこに行つたのかわからない、いつ戻ってくるかもわからない。この不確かさがあるために、その気持ちから離れること

【参考文献】
小此木啓吾：「対象喪失—悲しむということ」（中公新書）

●編集後記

新年明けましておめでとうございます。

昨年後半はアメリカ同時多発テロ事件と狂牛病の話題で、明け暮れました。また、日本の経済不況は今年も引き続きそうな気配であります。

古(いにしえ)を振り返ってみるのも、こうした不安な世の中に対処するひとつ的方法かも知れません。"古為今用"とまではいわなくても、古人の作品に目を向けるのも時にはよいのではないでしょうか。今回の特集"デジタルアーカイブ"は、古人の貴重な文献遺産を保存すると同時に、多くの人が利用できるようになるすばらしい試みだといえるでしょう。より多くの稀観本がデジタル化されることを私自身も願っております。ただ、その手触り、匂い、微妙な色具合など、総体としての書物のもつ味わいというのも忘れずにいたいとも思っております。

もう1つの特集は"SFCは慶應か"。人間、不安になったり、自信がゆらいだりする時、他人が自分をどう思っているか、気になることがあります。学生がこうしたテーマを思いついた背景には、SFC自体の不安、自信のゆらぎがあるのではないかでしょうか。今のSFCの学生が、まさに"自我作古"、"SFCが慶應だ!"と言い切れないところが辛いところです。

いずれにせよ、とにもかくにも、年は明けました。ゆったりと温泉にでもつかりながら、昨年の垢をしっかり落とし、よりハードになるであろう2002年に備えたいものです。

今年こそ、あるいは今年も、皆さまがたにとっていい年でありますように。
祝新年快樂、万事如意!!

編集幹事 氷上 正

KEIO SFC REVIEW No.12 2002年1月1日発行

発行人 小島朋之

発行所 慶應義塾大学湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL. 0466-49-3437 FAX. 0466-49-3594

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jp

制作・印刷

株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川1137番地

TEL. 0466-87-5811 FAX. 0466-88-6560

<http://www.printopia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学湘南藤沢学会までお寄せください。

バックナンバー、年間購読をご希望の方は、

TEL. 0466-49-3437 FAX. 0466-49-3594

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jpまでお申し込み下さい。

年間購読は、年4回(1月、4月、7月、11月)発行予定で年間200円の割引があります。

手数料(送料込)を含め、合計1,800円となっております。

編集委員の募集を行っております。

興味のある方は、E-mail:review-editor@sfc.keio.ac.jpまでご連絡ください。

SFC REVIEWのページ

<http://www.review.sfc.keio.ac.jp/>

■編集幹事

氷上 正 (総合政策学部助教授)

■特集幹事

特集1 滝川雅俊 (環境情報学部教授)

特集2 阿川尚之 (総合政策学部教授)

■編集委員長

松田 龍太郎 (環境情報学部3年)

■副編集委員長

北本 かおり (総合政策学部3年)

■編集委員 (*ディレクター)

編集部門 :

*中込まり子 (総合政策学部3年)

石井智彦 (総合政策学部2年)

原孝幸 (環境情報学部3年)

岡義親 (総合政策学部3年)

校正部門 :

*藤谷一郎 (総合政策学部3年)

斎藤麗 (環境情報学部3年)

中迎敦子 (総合政策学部3年)

総務部門 :

*加藤祐矢 (総合政策学部2年)

丹内裕康 (環境情報学部1年)

イベント・広報部門 :

*安井元規 (総合政策学部2年)

■特集担当

特集1 鷹箸真由美 (総合政策学部3年)

刀田聰子 (環境情報学部3年)

特集2 南智佳子 (総合政策学部2年)

松崎彩 (環境情報学部2年)

■レイアウト

刀田聰子 (環境情報学部3年)

南智佳子 (総合政策学部2年)

■写真

岡千尋 (総合政策学部3年)

三宅奈保子 (環境情報学部1年)

■模型

稻葉佳之 (総合政策学部3年)

■湘南藤沢学会

田坂真美 (事務局)

make your campus

02K(カツバ)館 研究棟

